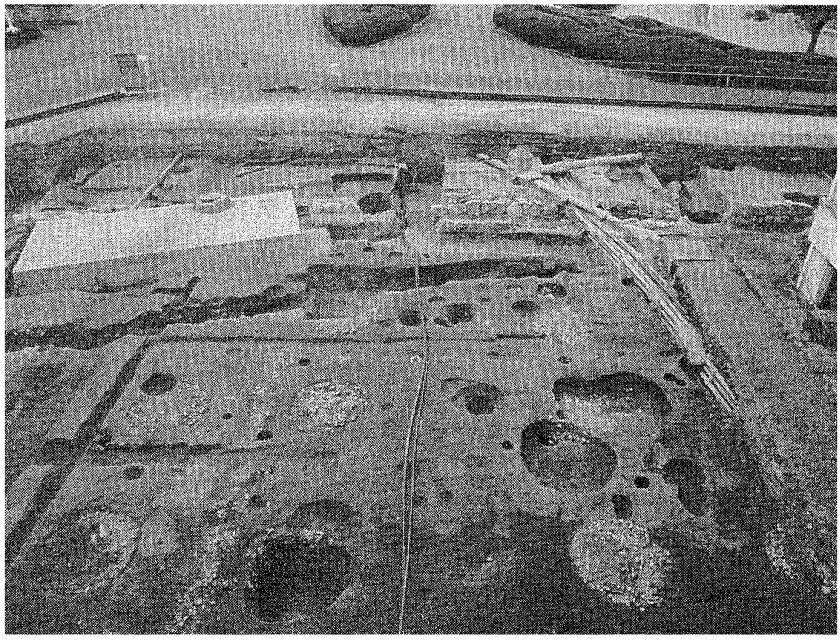
方　広　寺　跡

京都国立博物館構内遺跡発掘調査
現地説明会資料２



南門跡の根固め発見状況（北から）

1998年11月14日

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

方広寺跡発掘調査現地説明会資料２

所在地 京都市東山区茶屋町527　京都国立博物館構内
調査期間　1998年６月１日～継続中
調査面積　約700㎡
調査主体　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

１　調査の経過

今回の調査は京都国立博物館新館建設に伴う発掘調査で、調査対象地は既存の新館周辺約1500㎡です。まず６月から新館の南側に東西約64m、南北約7mの調査区（２区）を設定して調査した結果、「国指定史跡方広寺石塁」の延長にあたる寺域南面の巨石列（石垣）を大変良好な状態で検出することができました。現在はその東側に東西約28m、南北約23mの調査区（１区）を設定し、調査を実施しています。現在までに２区で検出した石垣に延長する東西方向の石組溝、その北側の方広寺旧寺域内にあたるところでは方広寺南門と回廊跡を確認しています。

２　調査地の歴史的背景

調査地点は平安時代後期には後白河法皇の後院であった法住寺殿（ほうじゅうじどの）、鎌倉時代には六波羅政庁に隣接し、桃山時代以降は方広寺境内に該当します。現在も博物館の南に法住寺殿の堂宇のひとつである蓮華王院（れんげおういん）（三十三間堂）、北に豊臣秀吉をまつる豊国神社、そして方広寺があります。

方広寺は天正14年（1586）、豊臣秀吉が奈良東大寺にならって大仏建立を志し、造営が開始されました。文禄４年（1595）、高さ六丈（約18m）の木製金漆塗坐像（きんうるしぬりざぞう）大仏が安置され大仏殿もほぼ完成しましたが、翌年慶長元年（1596）の地震のため大仏は大破してしまいます。慶長３年（1598）大仏開眼供養をまたずに秀吉は死去し、その遺志を継いだ秀頼が大仏復興を命じ再建を開始、途中、火災に見舞われるなどして、慶長17年（1612）にようやく銅造大仏が完成しました。その後、大仏は銅造から木造に造り替えられましたが、寛政10年（1798）大仏殿本堂に落雷、焼失するまで、「京の大仏さん」として親しまれていました。巨大な大仏殿や、茶店などが建ち並び大勢の人たちで賑わう門前の様子が、洛中洛外図などにも描かれています。

現在、往時の様子を残すのは大仏殿正面の門跡と寺域の西・北・南面の石垣、梵鐘だけとなり、旧境内は現方広寺、豊国神社、京都国立博物館の３ヶ所に分割され今日に至っています。なお、現存する石垣は昭和44年に「史跡方広寺石塁および石塔」として国の史跡に指定されました。

焼失以前の方広寺の規模は史料によると南北百二十間、東西百間とあり、現存する石垣から南北約260m、東西約210mの規模であったと推定されます。仁王門跡は西面中央やや北よりに位置し、この正面に大仏殿が建っていました。石垣は現在西辺全面と断続的に北面、そして南西コーナー部から東へ続く南面が約25m残っており、東辺の石垣は現存しておりません。２区では東西約48mにわたって石垣を検出し、現存するものとあわせると南

面石垣は90m以上あったことが分かりました。今回の調査地点は、この南面石垣の延長部分とその北側の寺域内にあたります。

3　遺構

調査区中央北側の方広寺寺域内にあたる位置では、南門とその東側に取り付く回廊跡、回廊に伴う雨落溝を検出しました。また寺域の南限にあたり、南面石垣に延長する東西方向の石組み溝は、２区で検出したものとあわせて約40mを確認しさらに東へと延長しています。

南門　柱を据える礎石は残っていませんでしたが、礎石の下に設けた基礎部分を検出しました。これは検出面で直径約1.8m、深さ約１mの大きな穴を掘り、そこに拳大の礫と粘土を詰め根固(ねがた)めとし、これにより建物の重みで礎石が傾かないようにしたものです。この根固めを10ヶ所で検出し、その並び方から八足(やつあし)門という門の跡であることが分かりました。八足門は扉の付く中央柱列の前後にそれぞれ４本ずつ柱があり、合計12本の柱で屋根を支える門です。屋根に葺かれていた瓦や太い柱の重圧に耐えるために、礎石の下には今回検出したような穴を掘って礫を詰める基礎工事をしたのです。検出した門の規模は東西三間（約13.6m）南北二間（約８m）で、当時の単位で言うと桁行中央一間18尺、東西各一間13.5尺、梁行一間13.5尺となります。

回廊　門跡の東側でも門のものよりやや小さい根固めを８ヶ所で検出しました。それぞれ等しい間隔で門の東西方向の柱列に並んでおり、ここに回廊が取り付いていたことが分かりました。根固めの規模は直径約0.9m、深さ0.5mで、拳大の礫に混ざって瓦の破片も見られます。その並び方から通路の中央に柱が並び外側に壁のある複廊と呼ばれる回廊で、柱間は桁行、梁行ともに12.5尺（約3.75m）と確認しました。またその南側、調査区の西端では回廊の柱列に平行して幅約1.4mの東西方向の溝を検出し、回廊に伴う雨落溝であると考えています。溝の中からは大仏瓦が多く出土しており、これらは回廊に葺かれていたものかもしれません。

石組み溝　２区で検出した石垣の延長上では、東西方向の石組み溝を検出しました。一部石は抜き取られていましたが、調査区の東端まで確認しさらに東へと延長しているようです。この溝は埋土の様子から排水用に造られたもので、出土した遺物から18世紀後半頃まで使われていたことが分かりました。

南面石垣　２区から延長する巨大な石を用いた石垣は、調査区中央付近で南に曲がって南北方向に続くことが分かりました。これより東は石組溝により、寺域の南限を示していたようです。石垣が南に曲がる位置はちょうど南門の西端にあたり、石垣のあった部分と門前より東では大きな段差があったことになります。また調査区西側、本来石垣があった部分は、一部石垣を埋めて石組み溝に造り替えていることも分かりました。

4　遺物

出土した遺物は瓦類がほとんどで、「大仏瓦」と呼ばれる大振りな瓦が見られ、瓦当面に桐文を飾った軒瓦などもあります。土器類は土師器・焼き締め陶器・国産施釉陶器などの小片が少量出土しています。

5　まとめ

今回の発掘調査の結果、方広寺南面石垣の延長を検出し、南門と回廊跡を検出したことで、方広寺南辺部の様子や境内の規模など多くのことを知る資料を得ることができました。

方広寺を描いた絵画資料では西面の石垣は描かれていても、南面については石垣が表現されているものは少なく、また南西部に東西方向の南面石垣が現存しているものの、その延長がどのようになっているかは不明でした。南門については四足門（よつあし）が描かれており、回廊は２本の柱の間が通路となる単廊がめぐっていた様子が表現されています。

調査結果から、南面石垣は１・２区あわせて東西約105mあったことを確認し、さらに南門付近で南に曲がって延長していたことが分かりました。創建当時からこれより東に石垣が延長していた痕跡はなく、石垣の現存しない東辺も石垣は巡っていなかったと推定できます。また南門は、絵画資料に描かれている四足門より格の高い八足門であったことが分かりました。方広寺の門は、このほか寺の正面にあたる西面の仁王門があり、こちらは楼門（ろうもん）（屋根構造が二重の門）で絵図にも大きく立派な門が描かれています。今回検出した南門は仁王門には劣るとはいえ、その規模や構造は絵図に描かれたものより格調高く堂々と建っていたに違いありません。文献史料によると、豊臣秀吉が方広寺を創建した当初、寺域を囲んでいた築地塀は慶長元年の地震で崩壊してしまい、その後、慶長五年より秀頼が再建した際、回廊としたとされています。調査では築地塀の痕跡は確認していませんが、回廊は秀頼による再建時のものと考えています。また、調査地点の南方には現在も蓮華王院南大門があり、蓮華王院の西、南に現存する「太閤塀」とともに秀頼が慶長四年に築いたものです。検出した南門跡はちょうどこの蓮華王院南大門と南北線上に並び、蓮華王院周辺も含めた秀頼による方広寺再建に伴う一連の仕事として、南門も回廊と同時に築かれたと推定できます。

これら検出した石垣、門、回廊の位置や規模と方広寺伽藍図にある建物の配置や規模から、寺域の復原も可能となりました。（復元図案）

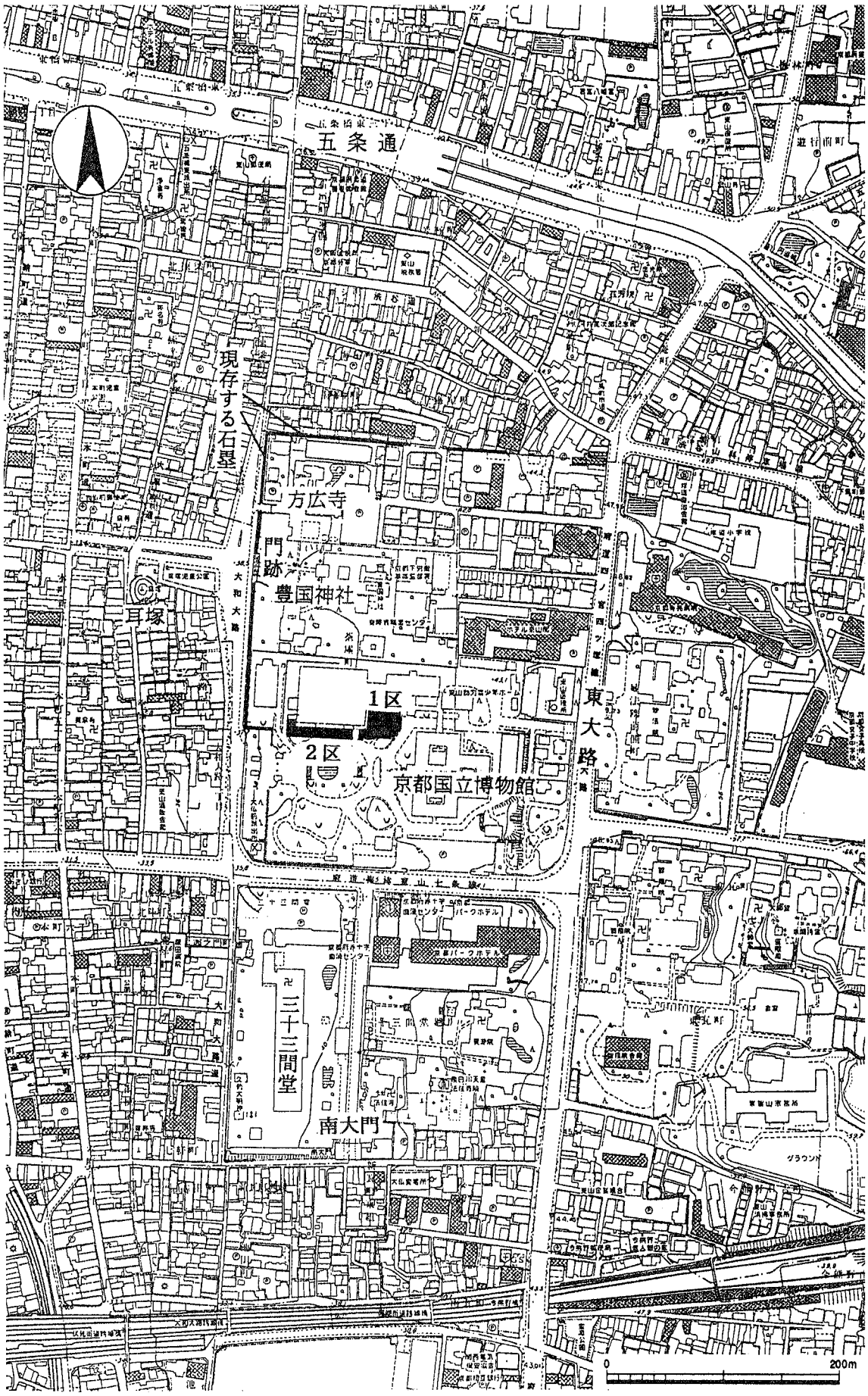
方広寺伽藍図（日本建築学会編『日本建築史図集』）に記載された建物の規模

回廊外側	南北京間百二十三間二尺九寸
	東西京間九十八間一尺四寸
五間楼門（仁王門）	桁行十五間二尺九寸　梁行六間一尺
南八足門	桁行六間六尺　梁行四間一尺
大仏殿	桁行四十五間二尺七寸
	梁行二重七間六尺三寸

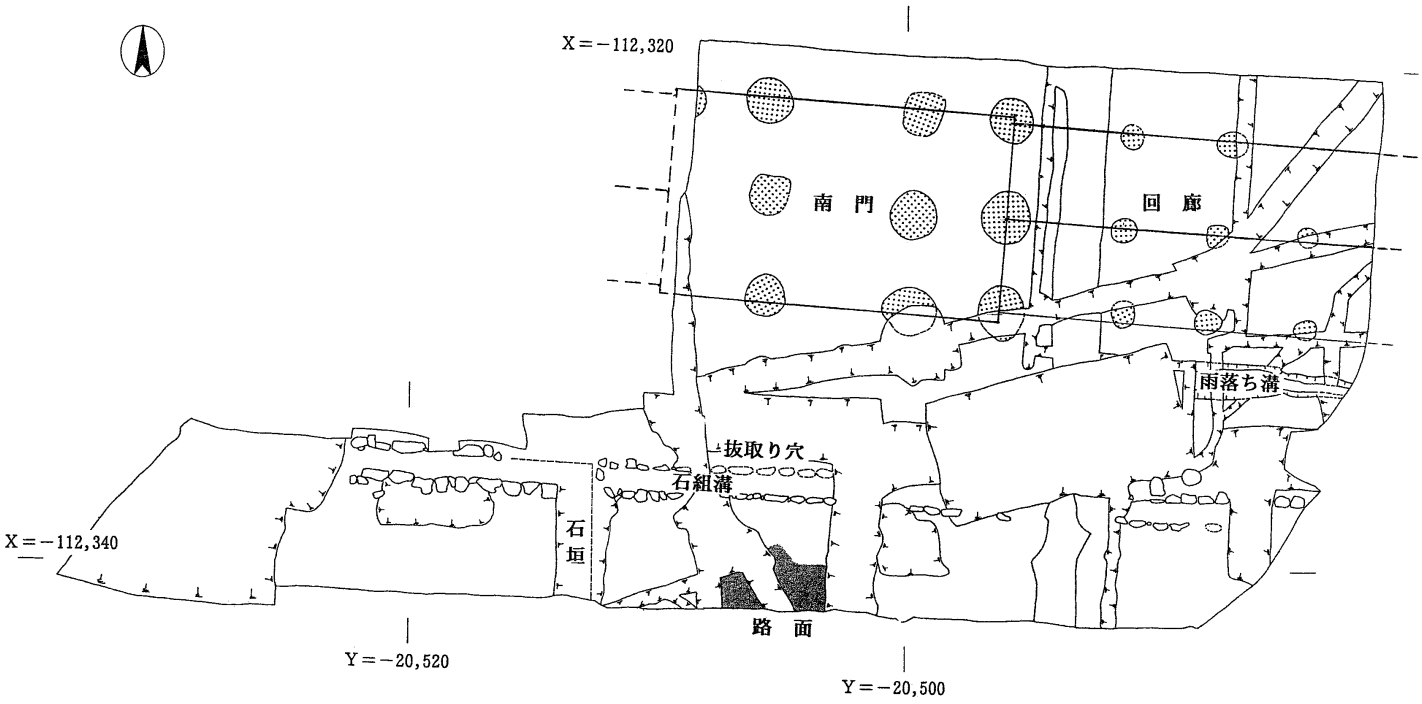
なお、現在も豊国神社の東側には周辺より一段高い大仏殿の基壇にあたると考えられる部分が残っています。

豊臣秀吉・方広寺関係年表

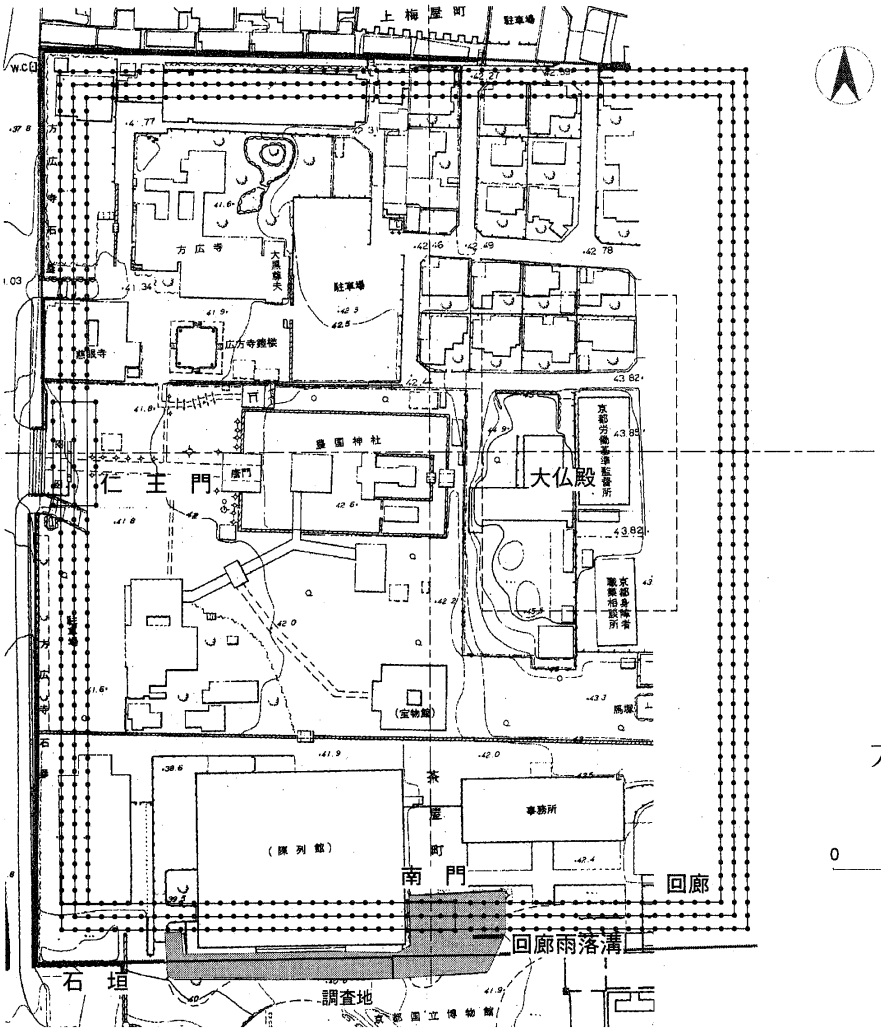
天正13年（1585）秀吉、関白となる。
14年（1586）聚楽第造営開始。
大仏殿建立の地を「東福寺近傍」と定め、諸大名に用材の諸国運上を命じる。
秀吉、太政大臣となり豊臣姓を与えられる。
15年（1587）聚楽第ほぼ完成し、秀吉、大坂より移る。
16年（1588）大仏殿建立再開。建立地を蓮華王院（三十三間堂）北側に変更。
18年（1590）小田原攻め。天下統一完了。
秀吉、京都の町割り改変に着手。
19年（1591）大仏殿立柱式行われる。金銅仏から漆膠仏（しっこうぶつ）に変更。
御土居築造。同年中に完成。
秀吉、関白職を譲り、太閤となる。
文禄２年（1593）方広寺大仏殿上棟を行う。
３年（1594）伏見城完成、秀吉移る。
４年（1595）大仏殿ほぼ完成。秀吉、父母の法会を大仏経堂で行う。
慶長元年（1596）畿内に大地震。方広寺大仏と築地大破。伏見城も崩壊。
秀吉、大仏像にかえて善光寺如来を迎えることを命ず。
２年（1597）伏見城再建、秀吉入城する。
３年（1598）７月善光寺如来到着するも、秀吉の容態悪化にともない８月に送返。
８月18日、秀吉伏見城にて死去。
８月22日、如来不在のまま大仏殿で大仏開眼供養が催される。
４年（1599）豊国社遷宮式行われる。
秀頼大仏復興を決定。大仏は金銅仏とする。
蓮華王院南大門・西大門および西・南延べ230間半におよぶ土塀（太閤塀）を築く。
５年（1600）方広寺大仏殿再建開始。新たに回廊の建立を始める。
関ヶ原の戦い。
７年（1602）鋳造中の大仏より出火、炎上。
13年（1608）秀頼、再度大仏復興を企図。費用・用材の準備開始。
16年（1611）６月、大仏殿地鎮祭。８月、立柱式。
17年（1612）大仏に金箔が押され、台座・敷石など大半が完成。
19年（1614）梵鐘完成。家康、梵鐘銘文に異議をとなえ大仏開眼供養の延期を命じる。
元和元年（1615）大坂夏の陣。豊臣氏滅亡。
寛文２年（1662）地震にて大仏小破。木像に造り替えられる。
７年（1667）木像仏完成。
寛政10年（1798）大仏殿本堂に落雷、出火。本堂、楼門、大仏焼失。


五条通
現存する石塁
方広寺
門跡
豊国神社
耳塚
大和大路
1区
2区
京都国立博物館
東大路
三十三間堂
南大門
0
200m

調査位置図

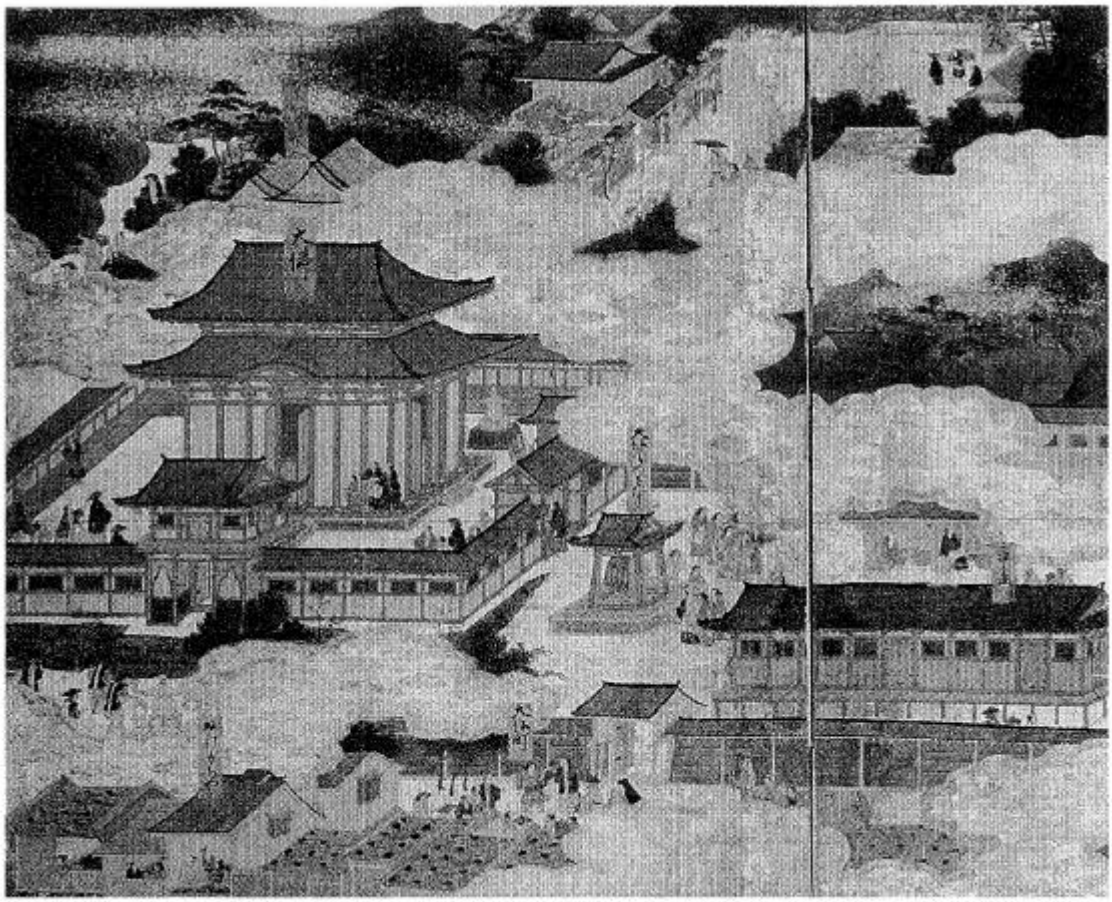


遺構配置図（1：200）

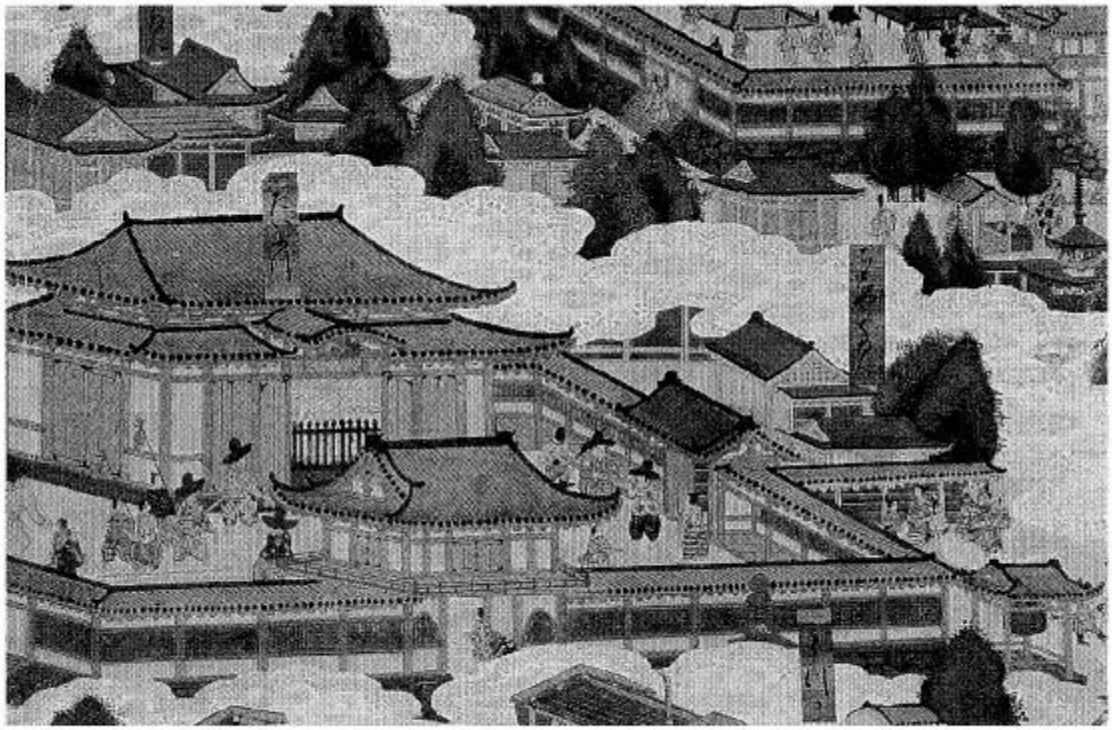


方広寺伽藍復元図案

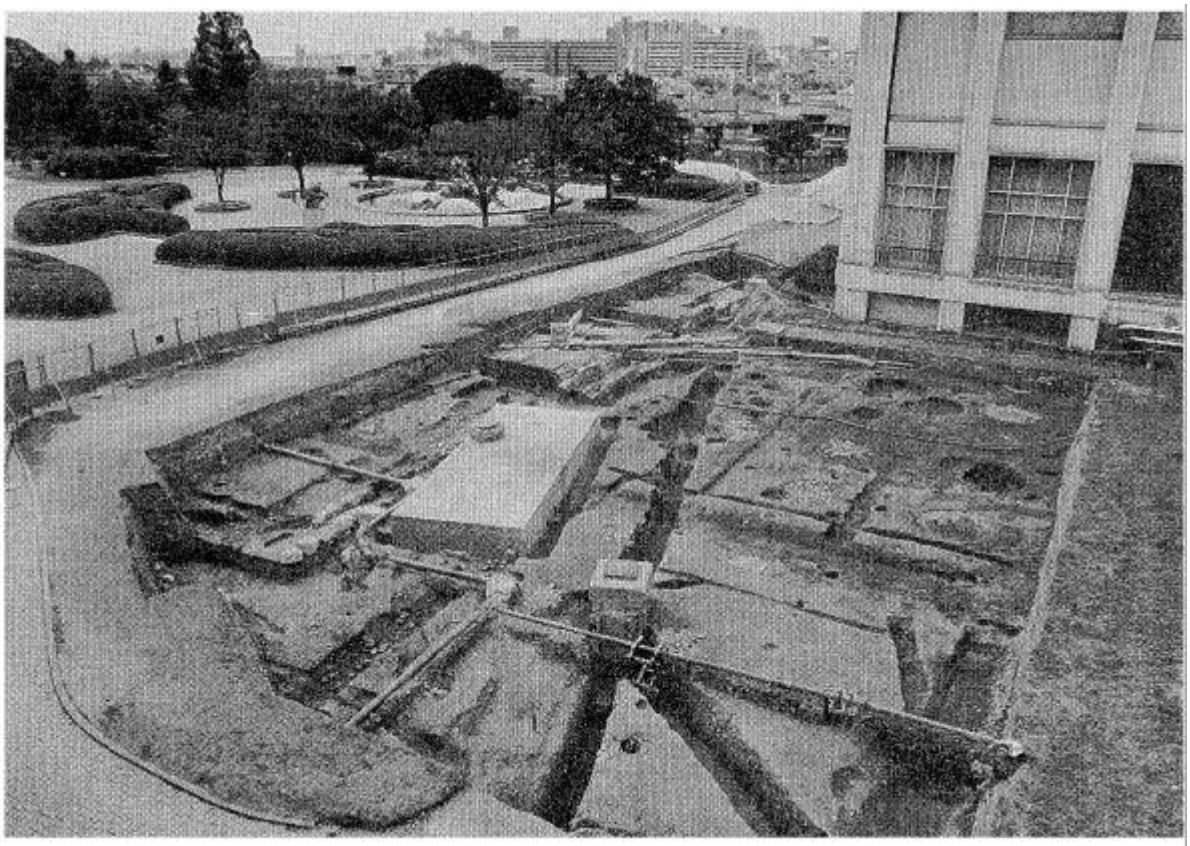
0　50　100m



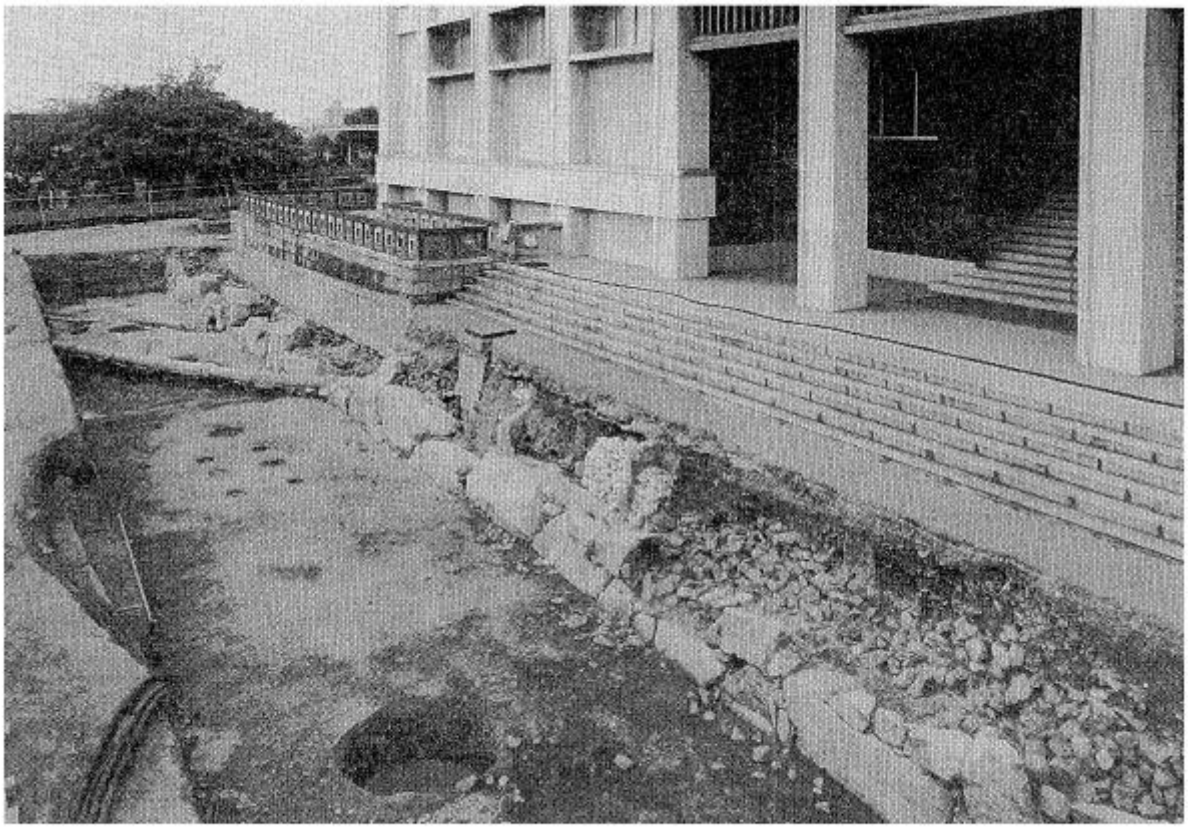
洛中洛外図　　大阪市立美術館蔵　（『洛中洛外図』京都国立博物館編から）



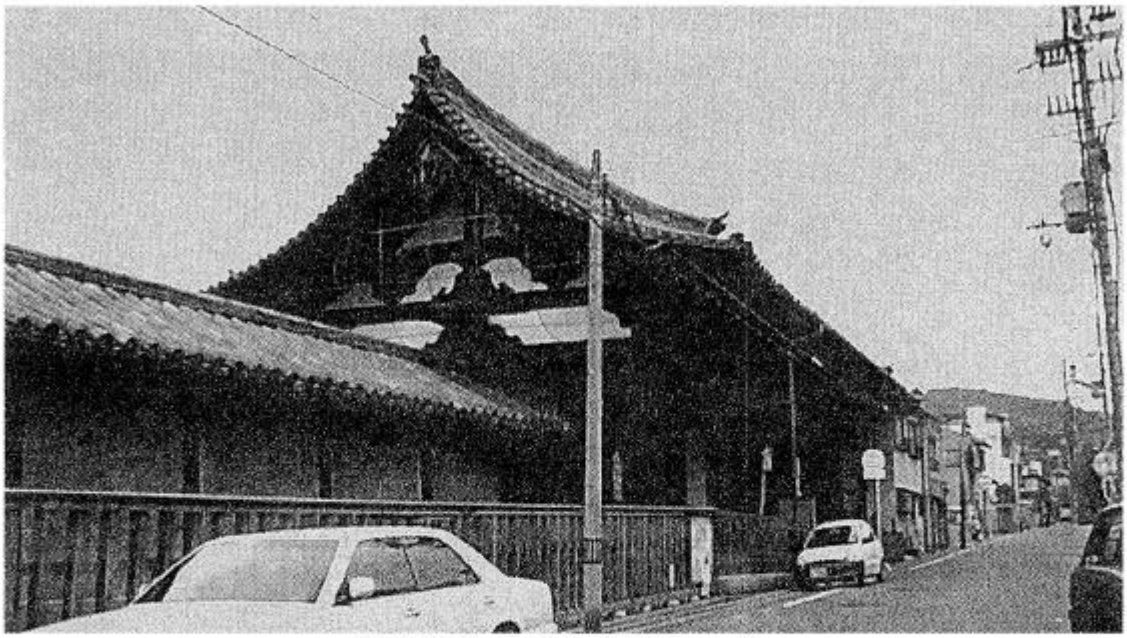
洛中洛外図　（池田本）　林原美術館蔵　（『洛中洛外図』京都国立博物館編から）



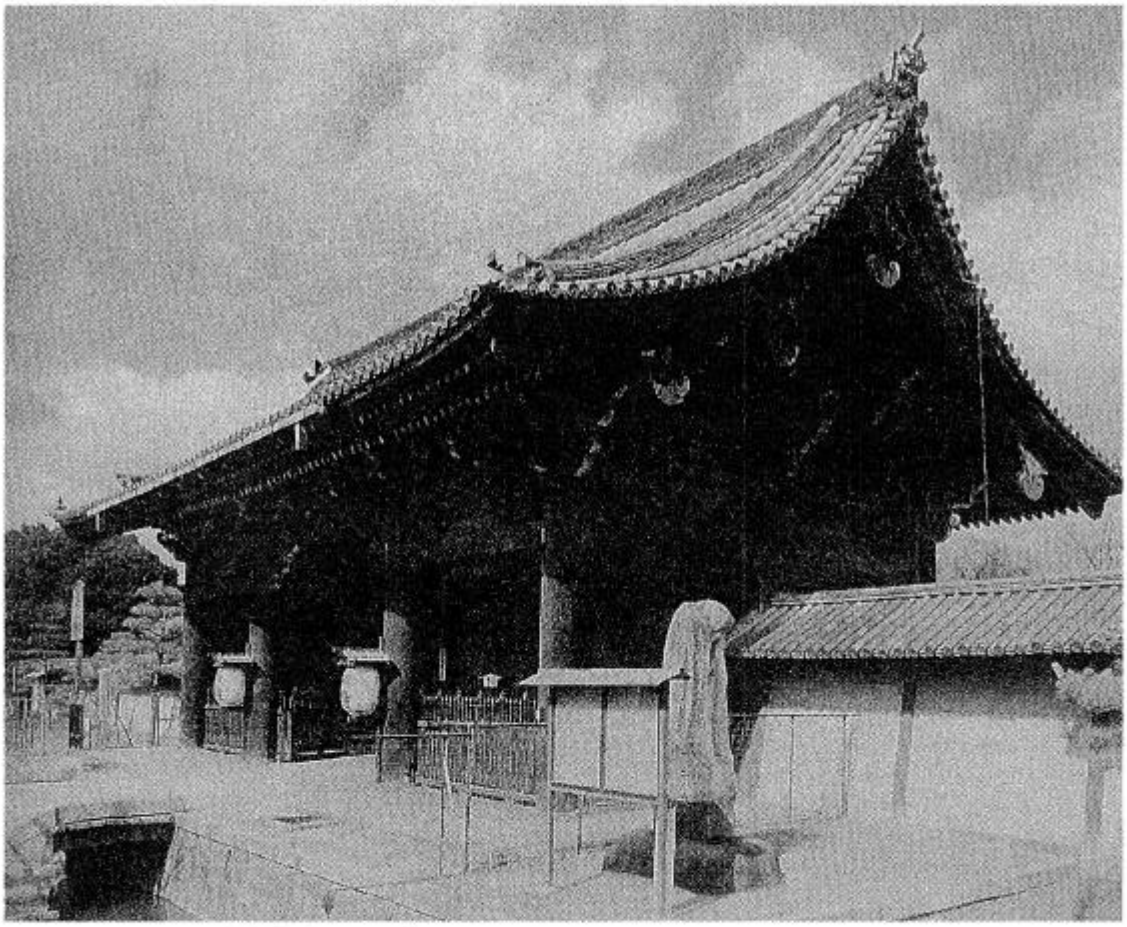
今回の調査地全景（北東から）



２区　調査地全景（南東から）



蓮華王院南大門（南西から）



東寺南大門（南東から）『東寺の建造物』から

※八足門

検出した方広寺南門、蓮華王院南大門、東寺南大門はいずれもほぼ同時期に建てられた八足門です。現在の東寺南大門は、本来七条通りと大和大路の交差点にあった崩門（九頭竜門）という門を明治時代に移築したもので、棟札には「慶長六年」に造られたことが記録されています。